慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「シーボルト」は如何にして日本を研究せしや
Sub Title	
Author	呉, 秀三(Kure, Shuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.101(571)- 134(604)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「シーボルト」は如何にして日本を研究せしや

本文は去る五月二十六日三田史學會講演會に於ける吳博士の講演速記を博士の校訂を經て茲に掲ぐるものなり（編者識）

私は今日幹事さんからして午後二時に出頭して何か話をするやうにと云ふことで、其積りで二時少し前に參りました、のみならず三時には三上君が來られる譯になつて居ります、一時間お話する積りであります。所が前に瀧本博士の新井白石の經濟學說のお話があり、後に三上博士の新井白石に就きての御話がありまして、其間に挿まつて私がシーボルトの御話をする譯であります、今年は——或は來年は新井白石先生が歿せられてから二百年になるので、それでそれに因んで此會にも白石先生の講演があるのであります、其處へ以て來て私がシーボルトのお話をするのは一寸異なことの樣であります、併しそれは全く因緣がないと云ふ譯ではない、白石先生は經濟學を始めとして種々な學問の大家でありますが、其中にも和蘭學即ち西洋學が白石先生から初まつたのは人の皆知る所であります。此方（コノカタ）には「西洋紀聞」と云ふて先程お話のありました伊太利の人から西洋の事を聞いてそれを記して本にしたものがあります。又「采覽異言」と云つて同じく其者から聞いた事に付て色々な世界の輿地のことなどして書いた物があつてそれが先づ日本で西洋學を傳へた嚆矢であります。此次に此方が歿つてから二百年シーボルトが日本へ來てから百年に當るのであります。シーボ

ルトは西洋の新智識を近く輸入した人で、日本へ來てから百年、西洋學を我邦で始めて言ひ出した白石が死んでから二百年。ですから全く緣が無い譯ではない。シーボルトの我邦に來てから和蘭學の極盛の時代が作られ彼が日本の醫學其他の學問を非常に盛んなる形勢に導いたのでありますから私はシーボルトに付ては諸君が皆御存知の方であると假定して——假定は失禮ですけれども、マアさう考へまして、餘り知渡つたことをお話するのは如何かと思ひますからして、シーボルトに關するさういふ事柄は措きまして、シーボルトは日本を如何なる方法で研究したか、どんなやうな工合にして日本を研究したのだかと云ふことをお話する積りであつたのです。それで第一にはシーボルトはどんな人であるかと云ふこと、第二にはシーボルトが日本をどういふ機會に於て日本を研究し又日本の何處に居て研究をなしたのであるか、

第三にはシーボルトが研究した成績はどんな風なものであるか、第四には其研究材料はどういふやうにして掌中に入れたのであるか、どうして研究したかと云ふことを御話してそれから若し時間がありましたならば少しく結論のやうなことを申上げたいと思ひます。

第一、シーボルトは如何なる人であるか。

シーボルトは一七九六年に生れて一八六六年に死んだ人であります。彼は累代多數の學者を出したる系統の家に生れた人でありまして、其祖父はカール・カスパ・フオン・シーボルトと謂ひまして、獨逸の外科學の始祖、其當時の外科學のオーソリチーであつた有名な外科學者であります。シーボルトが學問をした處はマインといふ河の傍に在る所の小高い綺麗な市のウュルツブルグといふ處の大學で研究したのであります。其大學に入つたのが二十歳、卒業したのが二十五歳で——一

八二〇年でありました。其間に於て自分の阿父さんが若い時に死んだものでありますから、有名な自然哲學者で解剖學者で生理學者であるデルリンゲルと云ふ人の家に厄介になつて大學に通つて居つた。シーボルトは日本に來て居る間でもデルリンゲルと云ふ人の恩を記念する爲に頭の髪を肌身に着けて居つたと云ふことであります。と云ふことは日本人ばかりがするのではなく、西洋にも恩を深く感ずるときそんなことをすると見えます。シーボルトはデルリンゲルの處に居る時分にオーケン・ネース、フォン・エーゼンバッハ、ダルトン・ハウゼン、ゼンメリングなどと云ふ其當時有名なる解剖學者、生理學者、萬有學者、自然哲學者がデルリンゲルの家に來られるものでありますからこんな大家たちに交際を得ることが出來たのであります、二十五歳の時に大學を卒業しましたが、シーボルトは萬有學、特に植物學の研究が好きであつた――醫學は勿論でありますが、其外にさういふことが好きである、尙ほ人種學或は國土學所謂地理學のやうなものゝ研究が大變好きであつて、若い時かうして何か獨逸あたり鄕里に近い所に居るよりは、何處か遠方へ行つて變つた事をして志を遂げて、シーボルト家の名前を天下に擧げたいと云ふやうな考があつたのであります。それで、ケンペルだのチュンベルグだのと云ふ人が昔シーボルトよりも前に日本に來ました、ツーン是等の人が日本へ來てどういふ事を研究して、どんな名高い人になつたかと云ふことはシーボルトが學生時代からよく調べて知つて居つて、自分もそんな事をしたい、其後を追ひたいと云ふ思想を有つたのであります。それはシーボルトが後に長崎に來ましてからケンペル、チュンベルグの記念碑を建てましたし又此頃朝日新聞で見ますと近江の八幡に或人の持つて居る簞笥がありまし

て、其篁笥にはシーボルトの手跡で何か書いてあるさうですが、其文句を見ると一方の隅にはケンペルと書いて、其片方の隅にはチュンベルグと書いて其傍に追慕の意味を載せた文字とか書いてあるさうです。シーボルトは若い中から日本學者のケンペルやチュンベルグに私淑して居つたと云ふことが考へられます。

かういふ學者が新たに大學を出まして、さうして東洋の方の研究をしたいと云ふものでありますからそこで獨逸の學界に於てさういふ人があるならばそれをどうか日本の方へ――或は東洋の方へ――遣りたいものであると云ふことで、色々學會で相談をしました上で、シーボルトの生れた處はウェルツブルクで、バヴァリヤの所屬でありますから、バヴァリヤの王樣の許可を得て和蘭に行きまして、和蘭國王に御願ひをして、さうして特別なる許しを得て、和蘭が其時分東印度を有つて居つた即ち爪哇です、主として爪哇に都がありまして其處を有つて居つた、即ち蘭領印度を有つて居りました、其蘭領印度の役人は和蘭人でなければ出來ない筈でありましたが、特にシーボルトを其處の衛生上等士官、軍醫に任命して呉れたのであります。

第二、シーボルトは如何なる機會を與へられて日本に來て、日本の何處に居て研究をしたか。

其當時先生に取つて幸ひであつたことは、和蘭は東方經略に付て新しい事を何かしたいと考へて居つたのであります。御承知の通り和蘭は一六〇〇年頃かうして日本に來て居つて、其後外の國々即ち葡萄牙とか西班牙とか云ふやうな國は島原の戰爭後、日本へ來ることを禁ぜられてしまつたのでありますが、和蘭だけは（支那と共に）日本に來ることを許されて居て、初めの中は毎年、後には何年に一遍、日本に船を寄越し、德川政府へ献

上物を持つては來たものであり、それは皆東印度に在つた和蘭商店が預かつてして居た事でありますが、千七百何年といふ頃から蘭領東印度商店が段々衰へて來、終には持堪へられなくなつて經濟上非常な破綻を來して、さうして和蘭の政府から直接支配をされるやうになつたが、和蘭の勢力も舊の如くでなく、殊にナポレオンの戰爭の時に於きまして、和蘭本國はナポレオンの爲に蹂躙され、合併されると云ふやうな始末でありましたから蘭領東印度も佛蘭西に取られ又後には英國に取られる樣な次第であつたから、日本へ船を出す所ではなくなつた、其頃有名なるカピテンヅーフが出島の蘭館長として日本の長崎に居つたがドウすることも出來ないで、十八年も日本に居たと云ふ位に、蘭領印度と長崎との交通が無くなつて、和蘭の日本に對する影響は甚だ微弱になつたのであります。その内ナポレオン戰亂は戢まり和蘭も復興して東印度領を恢復したので、そこで此シーボルトが來る時分には丁度和蘭政府はどうにかしてもう一度和蘭と日本との交通を昔のやうにしなければならぬ、それにはどういふ風にしたら宜いか、今迄の遣り方は餘り等閑であつたからして、今度は日本をもつと能く研究しなければならぬ、日本の國土日本の人民をもつと能く研究して掛からなければならぬ、一方我に於ては日本の國土人民制度風俗産物工藝學問等をもつと能く取調べて彼を探鑿し拔き、他方和蘭の文化的藝術や學問的知識をもつと日本の人民に傳へて我を理解し信頼せしめて、兩方からして日蘭の關係を能く整へて行かなければならぬと云ふことになつた、それが即ち和蘭の新らしい東方經略でありまして、それで人選の結果シーボルト先生は新しい醫學を修めた學者であつて、萬有學が特に熱心であるし、人種學や或は地理學等に付ても研究して居られるから、

此人が適任であると云ふことで、獨逸の人であるけれども、それを和蘭の人として東印度へ寄越すことになつたのであります、それは一八二二年の事で、其時の和蘭の王樣はウイリアム一世でありました。シーボルト先生はさういふ命令を受けてから其當時の有名な言語學者、萬有學者たちをパリスだのフランクフルトだのボンだのと云ふ處に訪ねたり或は手紙を出して意見を求めて、自分の日本に於て研究すべき事柄に付て種々準備をしました。シーボルト先生が日本へ來やうとして出發をしたのが一八二二年の九月、瓜哇へ來ましたのが一八二三年四月ズットと阿弗利加の南岸を廻つて來るのでありますから、大變に時日が掛つたのであります。瓜哇へ來た所が、其時の印度總督はファシデンカペルレンと云ふ人であつて、其人が非常にシーボルトの爲に便宜を圖つて呉れまして、僅かしか居ない中に今度は日本へ行かれるやうな機會を與へて呉れました。そこでシーボルト先生は色々其準備に掛かりまして、理學の器械、數學の器械、測量の器械其他日本人を驚かすやうな、精巧で實用の効力の多大な物を種々携帶しました、中には電氣の器械もありますし空氣ポンプなどもありますし種々の藥品、染料及び西洋紙、さういふやうな物を携へて昨年から百年前即ち一八二三年の八月十一日に長崎に到着しました。長崎に居ることが三年ばかりで、それから和蘭常例の聘使一行とともに江戸へ出て來ました、それが一八二六年の二月十五日(文政九年の正月二十日)で四月(三月)に江戸に着いて、さうして七月(六月)に長崎に歸りました、其間色々な宿々でそこの學者に面會をし或は病人を診察し療治し、病人の附添人に面會をして色々な知識を得たのでありますが、殊に當時の首府江戸に於ては當時の學

者、德川家の侍醫諸氏に交際をして色々と日本に關する知識を得ましたのであります。其以前から和蘭人の一行が江戸に來た時には何時でも天文臺の人と――それは主に外國の文書を掌つて居りましたから――侍醫の人々――醫學の研究は中でも自由であつたから――が和蘭人に面會することが出來たのでありますからシーボルトも此等の人々に面會をして、それに依つて日本の政治、歷史、地理、其他の知識を得やうと致しましたし、又自分の方からは其人等に萬有學の知識、病氣の診斷療法の方法又は種々西洋の事に付て日本の學者にそれ〴〵知識を與へやうとしました、此旅行中又江戸で接見した人々は其當時日本でも有名な學者で桂川甫賢、宇田川榕庵、栗本瑞見、水谷豐文、岩崎常正、石塚宗哲、土生玄碩、同玄昌、高橋景保、最上常矩、馬場貞由、さては島津重豪侯、奥平昌高侯などでありました。シーボルト先生はなほ江戸に行つた序に出來るならば內地も旅行したいと考へたのですが、それは出來なかつた。江戸にも大分長い間居たいと思つたのですけれども、それすら出來ないで長崎に歸つたのであります。即ちシーボルトは初め長崎に居た三年と、江戸に出た數ケ月居つた、それから長崎に歸つてからシーボルトの疑獄が起りまして日本を去つた迄の二三年、後に二度目に日本へ渡來した時一年ばかり居た、その年月が日本を研究した時期であります。

（演者は此時シーボルト先生の若い時分から年取るまで色々の時代の（寫眞供覽）シーボルトが先生の住宅或は其住宅の跡、植物園、鳴瀧の學舍、西洋及び日本にある記念碑などの寫眞を供覽せり）

第三、シーボルトの日本に於て研究した事柄。

シーボルトは日本に於てどういふことを研究したか、それは種々のことに亘つて居りますが植物學、動物學日本の國土國民につきての事柄をかいつまんで御話しませう。

シーボルトは一八二四年、(文政七年)に蘭領印度の總督の命令で植物園を開きました。それは長崎に和蘭人の今日なら寄留地といふ所で、出島と云ふ小さな扇形をした島がありますが、其中の花畑といふ所へ丁度一町四方許地所があるそれを利用して造つて、其處に日本の草花、支那の草花等を植えて門人等と一所にそれを研究したのですが、そこに栽培した植物は暫時の内に澤山になりましたし、次へ〳〵と段々に殖えてシーボルトの國へ歸る時分迄(一八三〇年)に實驗した植物は千四百種程になつて其中に腊落葉もありまして生きて　植付けてあつたのが百種もありました。此等多數の植物はシーボルトが日本を去るまでに自分が送出したり、又は歸る時分に携帶して行きまして、後に瓜哇に植え又和蘭本國に植えたものでありますが、自分がライン河の傍ジャルダンサックルマザチオン(氣候に馴らす植物園)といふ植物園を拵へましてそこに澤山植付けました。其園中には「日本」といふ別莊などを建て永く日本を忘れない樣紀念としました。此植物園から諸方へ分栽しまして日本の植物花奔が現今に至るやうに西洋各國の諸々方々へ植えられて賞美されるやうになりました。今ウユルテンペルグ國のウルムエルバッハ城にシーボルトの息女が居られますが、其庭園は日本の草木が澤山に植込んであつて、お客さんが來て庭へ出るときには日本の下駄草履を穿いて逍遙する樣になつてゐるさうで

です。此樣な澤山の蒐集植物から日本植物志が出來たのですが、此本には日本にある植物の殆んど總てのことが書いてある、その中にはバラにシーボルトの名の付いて居るものも澤山ある圖譜には百五十七葉ある又此本には宇田川榕庵、小谷豐文、伊藤圭介、最上德内、二宮敬作、桂川甫賢、小野蘭山、葛飾北齋などの名も出て居るし、直接此等の人々から材料を貰ひ説明を聞いたのもありますしその圖譜には又此次シーボルトと一所に植物を研究した、長崎の畫家川原慶賀の筆になつた圖も澤山あります。こゝに御目にかける慶賀草木卷には日本植物志の圖と同じものが數箇あります。それからシーボルトがどんな風に植物を蒐めて研究したかと云ふ事に付て、出島の和蘭の官廳からして東印度の總督へ向けて報告をした手紙があります一八二七年十二月の日附になつて居ます。

當日本國に於けるドクトル、フォン・シーボルトの博物學的研究の件に付重ねて貴意を得度一書拜呈仕候。私儀先般フォン・シーボルトの手に成りたる植物蒐集材料を一覽致候處そは實に宏大なる蒐集にして、博物學上の知識なき私共に於て一見致候ても、それを和蘭帝國博物館に收藏致候はゞ、そこの一大寶物として誇るに可」足ものと思考被」致候て驚歎之他無」之候。就てはフォンシーボルトは尚ほ一年間在勤延期相成候につき此貴重なる採集を繼續するため一八二八年度豫算中に彼が植物採集幷に研究の費用として六千兩(テイル)を御編入相成度此段相願候也

それは植物學のことでありますが、それから動物學に付ても決してそれに劣りはしない。今申上げた出島の植物園の脇に檻を設けて其處に動物を入れて置きまして狼、鹿、猿、山犬も居たさうであります又海豹、鯖などをもシーボルトは西洋へ持つて歸つたと云ふことでありますが、中には數年

間生きながら養つて置いて、よく馴れて居たのを持つて行つたものがあるさうです。其持つて行つた物の中で一番有名なものは大きな鯤魚（山椒魚）でシーボルトが一八三〇年に持つて行つたときには一尺ばかりの長さであつたが、それが一八三五年には三尺からの大さになつたと云ふことであります。シーボルトが一八二三年から一八二八年まで日本に居る間に蒐集した材料によつて出來たのは日本動物志で――植物の本は一冊である――四冊の大本ありまして、それに書いてありますものは哺乳獸が五十六種で、その内陸に棲んで居るものが五十種、海に棲んで居るものが六種、鳥類が二百一種、爬蟲類が三十四種で其内龜類が八種、蛇類が十二種、蜥蜴類が三種、水陸兩棲類が十一種、魚類が三百五十八種、甲殼類が百八十七種と云ふやうな多數の動物のことが記載されてあります。それに付ては隨分金も掛けたと見えまして、小倉で鶴を一匹十二乃至二十グルデン、江戸で獵虎を買つたのが七十金、大阪で白い鹿を買つたのが百五十金、それから彼の大鯤魚には十二乃至二十四フロレン、を支拂つたといふ工合で大分金も掛つて居る。それからシーボルトは鯨を繪にしたいと思つたのですが、中々大きくして繪に出來ない。でありますからして日本の人に賴んで小さな玩其のやうなものを作つてそれを寫眞にしてそれが右動物志に載つて居ます。動物、植物の材料蒐集の夥しい數に上つてそれを研究を致しましたこと右の如くであるが、其他日本の國土を研究するに付ての材料はどうであつたかと云ふと、是も決して少くなかつたものであります。

文政十一年即ち一八二八年にシーボルトが日本の天文地理の學者高橋作左衛門から日本の地圖を貰つたことから裁判事件が起つて、シーボルトも

色々取調べられた、一年有餘も出島に幽閉されて居つたのですが、其時分の調書がありますがそれは一々訊問と答辨とになつて書類になつて居ります。西洋人のことですから奉行から訊問をする箇條に付てシーボルトからそれに對するいづれも通譯官が飜譯したものです。是は第一回の訊問なのですが皆で二十三ケ條あります。その内容は如何にかと云ひますと、文政九年(月日不詳)文政十年三月(日不詳)文政十年七月三日、文政十一年一月十三日に高橋作左衛門に對し書狀を差出せしことありや、文政十年六月廿六日、文政十一年春高橋作左衛門より書狀を受取たることありや、江戸の地志を編纂せしことありや、自分經歷したる諸地方の經緯度を測量せしことありや、門人に氣壓計を以て富士山を測量させしことありや、その測量法を高橋作左衛門に傳授させしことありや、温泉嶽、烏海山、白山、御嶽などを測量せしことありや、高橋作左衛門より日本地圖、朝鮮地圖、江戸繪圖其他の地圖、間宮林藏の著述等を受取たるや、同人より琉球地圖、關門海峽の圖など借り入れ寫取りたるや、蝦夷の圖の縮寫を同人に依頼せるや、同人に長崎湊圖、マキシス記入の日本西南地方の圖クルーゼンステルン著四冊、マレイ語辭書、地理書四冊、蝦夷の記事、プラネタリウム、氣壓計、キユンストキム、佩劍の帶、クワランス、金サナダ等を送りたるや、同人へユロノメートルを送與すると約束せしや、その他日本揭掌細見圖の九州邊の部分、長崎の細かき圖、日本の圖にて朝鮮蝦夷カムチヤツカ迄認めたるもの、其他朝鮮琉球蝦夷の各獨立圖日本の三つに切りたる地圖、九枚の蘭紙に認めたる日本切繪圖等許多の地圖繪圖を所持せるが此等の文書地圖品物の往返につきて何人を頼みて送り屆け何人の手よりこれを受取りたるや、それ等の文書中にあるブロムホフ(其當時和

蘭商館長の姓なり）ゴロビウス（高橋作左衛門の和蘭語の字（アサナ）なり）ゴノスケ（和蘭通詞なる吉雄權之助のことなり）等は何人のことなりやなどといふことである。こんなことは餘事でありますけれども、今日迄まだ世上で發表されない云はゞ新らしいことでありますから珍らしさに申上げたのであります。

此時長崎の奉行から役人が出島へ出張してカピテーンと云ふ和蘭館長の部屋へシーボルトを呼出して置いてシーボルトの留守部屋へ他の役人が行つて家宅搜索をして、さうして色々な重要書類を引上げて後へは封印をした、其引上げた物はどういふものかと云ふと「日本輿地圖、蝦夷の地圖、同寫し樺太島の圖、日本の圖（別のものでせう）分間江戸の大繪圖、細見京繪圖、琉球の地圖、江戸名所繪、裝束圖式、天氣儀、氣候儀、朝鮮の圖大日本細見揭掌圖の凡例、推朱拵付脇差、黑鞘の刀、丸鏡、ケンペルの本、それから繪圖、公家の圖、（公家の裝束を着た圖でもありませう）古錢、桶狹間合戰略記、桶狹間古戰記、無間の鐘由來、中山の及惟子夜泣石敵討などでありました。尙ほ其外に當人の土藏二戸前封印をしたと云ふことでありますからどの位の土藏か知らぬけれども、兎に角其中に一杯日本の國土、人民、地理、歷史、其他に關した品物があつたものと見えます。其封印した物は禁制品でないと云ふことで、後で封印を取つて吳れたさうです。そんなものであるが、シーボルトはそんなことで色々のものを沒收されましたが、それでもまだ西洋へ持つて行つたものは夥しくあつたらしいのです。地理に關したものだけでも隨分に澤山ありました。歐羅巴でシーボルトが出版した地圖的のものは「日本及附近の諸國の海圖並に地圖」「日本の圖」「長崎港の圖」「ファン・デン・カペルレン海峽の圖」（是は長關の圖でありま

す)、「朝鮮半島の圖」「蝦夷の圖」さういふやうな物であります。それから尙ほ日本から持つて行つた地理に關する書物、地圖、繪圖、見取圖、それが百六十種、それは和蘭海牙の博物館に今でも皆殘つて居る。書物では日本の歷史地理に關するもので多くは一、二ヶ國の記述であるが各地的のものもあり、或は統計的のものなどもあつて、それが日本の殆ど各國に亘つて居る。中には紀行の樣なものもあるし、大和各所圖繪とか、東海道名所圖繪とか、橘南谿の東遊記、西遊記、南遊記から和漢三才圖繪などもあつた。地圖の方では何しろ一般的の地圖及某市某町局所的の地圖があり其大和、近江、播摩、攝津各所の地圖があり二十五萬分の一の京都の繪圖、江戸の繪圖、大阪の繪圖、長崎の繪圖がありました。日本總體の圖はシーボルト以外にも西洋に持つて行つたことはないではありませぬけれども、其小さな各種の地圖、はシーボルトが初めて之を歐羅巴に持つて行つたので、非常に珍重されたものであるさうです。最も右に擧げた日本及その近國屬國の地圖も前世紀後半に於て甚だしく貴重に取扱はれたものださうです。尙ほシーボルトが後に一八五九年から一八六二年に二度目に日本へ來た時がありますが、其時に持つて行つた、書物、器具が澤山ある、書物の方では「百科全書樣のもの二、歷史二、地理學地圖二十、紀行案內八、萬有學に關するもの三、植物學に關するもの二十五、動物學に關するもの十二、言語學に關するもの十六、宗敎に關するもの二十七、詩歌及び戲曲に關するものが二十二、統計財政に關したもの二十七、農作製造に關したもの十九、貨幣及考古學に關したもの八、醫學藥學に關したもの四、繪畫彫刻に關したもの三十三、神佛に關した畫四十一、衣服織物に關した繪三十一、繪畫が百二十三、貨幣に關した圖四十七、(內支那の貨

幣が四十七、日本の貨幣が六十二）度量衡の繪が十三、學術機械の圖が二十九、樂器の繪が二十、佛像畫が六十一、佛具の繪が五十一、神道の繪が二十五でそれから道具類は動物材料で拵へたものが三十四、植物材料で拵へたものが三十九、鑛物で作つたものが二十八、皮革で拵へたものが二、絹布類刺繡物類が七十二、木棉物が四、紙製のものが五十八、籐細工が八十六、箱指物が六十五、漆器が四百七十四、銅錫鐵等で拵へたものが二百七十八、陶磁器が十六、衣服道具化粧道具が五十七、武器が四十一、雜具が十六、蝦夷樺太の色々な道具が十七で、書物と道具と加ぜると皆で二千四百七十三點になつて居ます。是は二度目に日本へ來た時に持つて行つたものでありますが、第一回に來たときにも其前にも隨分澤山に持つて行つたものでありませう。それは私はまだ和蘭の首府に在る博物館の目錄を得ませぬから分りませぬが

決して之に讓らぬものと思ひます。

シーボルトの著述「日本」

はこゝに、御目にかける通り記事三冊圖譜二冊の大著述でありまして、この圖譜の方には日本の種々の事柄に關したもので澤山な圖が載つて居ます。是れは第一回に來た時の材料によつて書いたものでありますから、是も今御話した書物器具などに比べて其量に於ても品に於ても決して劣つたものでないに相違ないと思ひます。此「日本」と云ふ本にはドンナことが書いてあるか悉しく申上兼ます。其目次の大綱を申上げて御免蒙りたいと思ひます。その書付凡そ七部に分れて居ります。第一、は日本の數學上及び理學上の地文學（日本の發見、名稱位置廣袤區割）第二、は國民及び國家、（住民、制度、政治、法律、階級、民間の施設及會同、武具、陸上及び海上の旅行日記）第三、は神代史、歷史、考古學、貨幣學、第四、は美術及學

問、第五、は日本の宗教、第六、は日本の農業、工業及商業、第七、は日本の附近の國及び保護の國　以上が此書の七部であります。シーボルトは即ち前申上げた通り種々雜多の材料を蒐めて、それに付て詳しく記載をして、之によつて日本を世界に紹介して、日本の人民はどういふ人民であるか、信義を重んずる人民である、勇氣のある人民である、日本は歐米以外に立てる尙ほ一つの文明國であるといふたのであります。

第四、シーボルトはその研究は如何にして出來その材料を如何にして手に入れたか。

さういふやうな材料を蒐集し、又それを整理編成するに付てどういふ風にしたのであるかと、云ふとそれには色々その助勢があつた。その第一には、先程も申しましたやうに、和蘭政府がその東邦經略を一新して日蘭の關係を前よりも、もつと親密にしやう、それにはシーボルトが適任であるといふ考から寄越したと云ふこともありますし、第二には、印度總督が政府の命令を受けて特別にシーボルトに便宜を與へたといふやうなこともある。シーボルトが日本へ來ました翌年（一八二四年）にシーボルトの申請にして印度總督の日本の植物、日本の氣象、それから地質等を研究する費用として來年度に八千百三十一ギルターを支出することを許し、長崎の出島に植物園を創立する費用として二千百ギルダーを出し、そして又出島の館長にシーボルトの植物採集を輔佐し、又日本人に植物學其他を教授する爲に便宜を與ふる樣に命令をした、其代りにはシーボルトが採集した物は皆和蘭政府へ納めるが宜いし、毎年珍しいと思ふ植物を必ず爪哇へ轉送する樣にと命令しました。最も是は其時丈の話で後にシーボルトが色々な物を蒐めて和蘭に持つて行つた所が和蘭國王は特にそれをシーボルトに呉れて自儘に使用することを許したのであります。

さういふやうに特別な待遇をした他にシーボルトが江戸へ參府のときには蘭館長ストウルレルにはなるたけの便宜を與へる樣に言付けたし、又瓜哇から二人の助手を寄越した。其一人はビユルヘルと云ふ理學、化學、鑛物學等の學者で、もう一人はドウフイール・レネーヴエと云ふ即ち學問的取調の補助をする人と蒐集材料を寫生する人とを瓜哇からシーボルトのため出張させたのであります。シーボルトは此樣に和蘭政府並に印度總督からの助勢があつたのであります。

さて日本へ來てからの事柄を考へますと。シーボルトが自ら非常に骨を折つて種々な材料を集め、觀察をし研究をしたことは勿論でありますが、又日本人が大層好意を以て迎へて色々親切に取爲し助力したのであります。

シーボルトが日本へ來たのは一八二三年（文政六年）の新八月でありましたが、和蘭商館長から

も今度エライ醫師で萬有學者の某が來ると云ふ觸込もあつたのでせう、又實際にも人が譽めべきだけの腕があつたのか暫時に人々がそれを信用する樣になりました。初めは出島の和蘭屋敷の中で病人を見て居ましたが、段々門人も增えるし、何かを問ひに來る人も多くなつて來まして、中には通詞の家來などになつて辨當をさげて出島へ入り込んでシーボルトに就いて學ばうとする人もあつた、その中特にゆるされて市中へ出て、診察や療治をする樣になつた。それは長崎の醫者で吉雄幸載だの楢林榮建、宗建兄弟だのゝ家でするのでありました。醫學醫術ばかりではない、動物、植物、鑛物などのことも間々（ヒマ）に敎へて居たのです。その中に又町年寄の周旋で御奉行の許可が出て、鳴瀧と云ふ町外れに宿所を買つてそこで每週一回和蘭語で醫學、藥物學、萬有學の講義をする樣になつたが、是時から我日本で醫學、醫術の稽古をするのに書

物や口舌だけのことでなく患者を前に置いて實地に當つて診察の仕方を敎へ又療治をして見せる樣になつたのであります、今日の研究敎導の仕方手術臨牀講義や實地試驗が此時から初めて日本にある樣になつたのです。其時に外科手術などをするには初めに和蘭商館長に申し出して、それから長崎奉行に出願して、その許可があつてからでなければ、出來なかつたのださうであります。その療治の効果が著しかつたので驚くべき醫者だ神の樣な醫者だと云ふので、その名前が漸々高くなつて、とう〳〵日本中から有爲な書生が長崎へ〳〵と集まる樣になつた、濱長安、美馬順三、二宮敬作、高良齋、岡研介、高野長英、小關三英、伊東玄朴、戸塚靜海、竹內玄同、靑木周弼、黑川良安などいふ樣な俊才の大器の人々がシーボルトの名前を慕ふて來たのでありました。中でも二宮敬作は色々の仕事で、美馬順三は日本醫事の和蘭語へ飜譯で

高良齋は又和蘭醫事の日本語への飜譯で、高野長英等は日本の國土國情を知るべき樣色々な事について述作をしてシーボルトの研究事業を助けたのであります。鳴瀧の塾には室內に圖書器械藥品を備へ付けて置いて、講義や研究の出來る樣に仕度をなしてあるし。庭園には――出島の植物園は廣くもあつたがこゝにも――九州各地の植物は勿論だが、和蘭瓜哇から取寄せた草花も植えてあつて、植物學、藥物學研究の資料にしたシーボルトは時々友人門下を案內として又相手として長崎近傍に出掛けて行つて動物を集め、植物を採り地文學的國土學的觀察をした。通詞の內でも隣に住んで居た茂傳之進や稻部市五郎などいよ〳〵植物採集の案內に立つたと云ふことである。出島の和蘭館部屋附の源之助、熊吉など云ふものは押葉や剝製をすることをシーボルトに敎はつてそれに力を添へたが、門生たちもそんなことに手傳つたのは勿論

である。萬有學的、地文學的、人類學だの色々の畫は日本の人で川原慶賀西洋人でウイーユネーブへ・エルクスネルレンなどがシーボルトには賴まれて書いた。慶賀の著はした草木卷といふ書物にはシーボルトの日本植物志に載つて居る圖譜と同じのが數通もある。シーボルトは出島では三十疊許の大きな部屋の中央に四間程の長さの机を置いて、机の周圍の壁際には架棚(オキトダナ)を取付けて、そこに多數の圖書を並べ、机の上には植物の押葉など堆きまでに置いてあつて、その蔭で餘念もなく夜晝ともに我日本に關することを取調べて居たと云ふことでありますが、日本語を覺えるといふので厠の中や室の壁へ、イロハを書いた紙を張り付けてそれを見ては字を書くことを練習したさうです。兎に角シーボルトは長崎に滯留中一生懸命に日本の國土國民について研究をしました。シーボルトが江戸に出府した旅行中にも彼自身中々興を有つ

て居ります。その旅行の準備品の中には氣壓計、トルリッエル氏の測高計、サウシユール氏の驗溫器、寒暖計、クロノメートル・セキスタント、人工水準器、ブッソーレなどゝ云ふのが主要なものとして收められて居りました、是は我邦に於て主要な都市、重要な地點に行くとそこの地理學的測定をしやうといふ目的で、携えて行つたのでありまして、實際又旅行中に小倉、下關、京都、大阪、內海の諸所、東海道の各地で經度緯度を測り山の高さを測り潮流や海の深さを測りましたが一行の人々が殊に和蘭使節を初めとして、學問的需要を左程認めないのにかゝはらず、一行の後になり先になりして、それに盡力しました。中でも困難であつたのは山の高さや海の深さの測量であつたらうと思ひますが、山の測定などには自から高地晴雨計を作つてそれを用ひたと云ふことであります。富士山は道中筋にあるからそれを測つたのは勿論出來たで

せう――それは門人二宮敬作氏が手を下して測つたらしい此人は温泉岳の高さもシーボルトに頼まれて測りました――道筋からは飛でもなく離れて居る白山、鳥海山などを測つたのは誰かに頼んだのでせうが骨を折つたものであります。旅行中には日本の役人の目を避けるため又矢釜敷咎め立てを避けるためクロノメートルは使節の時計を調節するために必要だと稱へて言ひ拔けたり、磁石の器械を帽子の中へ仕込んで持つて歩いたなど色々の苦心談があります。

シーボルトは日本の人々に面會し談話でもすれば何吳れとなく日本のことについて聞糺し書物なら飜譯して貰ひ器具などならば說明をして貰つて色々な機會を捕へては研究したものである。其他滿洲樺太のことは最上德內や栗本瑞見につき又間宮の東韃紀行などを讀んで調べましたし。朝鮮のことについては朝鮮人、日本の士官、對馬の役人釜山の日本商館の人々などに聞いたり其頃日本の海岸で難船した朝鮮人があつたので、それを訪問して調べたり一六四五年（正保二年）鞭靼の海岸で難船して北京に送られ朝鮮を經過して鄕里に歸つて來た日本水夫の報告などまで參考に調査したのであります。如何に彼が勉勵して拔目なく取調べたかは此等のことを考へても分ると思ひます。

日本の役人、學者、其他上下の人々がシーボルトの日本研究に好意を以て助力したのはシーボルトの初度長崎到着以來のことであります。シーボルトは初め長崎の出島について、そこの隔離された樣な不自由な所で少し宛療治だの研究だのをして居つたその時分既に長崎の奉行土方出雲守殊には高橋越前守が好意を以て醫師學者の出島出入を前よりも自由にして吳れたのであります。町年寄であつた高島四郎太夫（秋帆）同菅原碩二郎は色々周旋してシーボルトが町へ出て療治の出來る樣

に取計つてやつた、それを許可したのは勿論長崎奉行である、シーボルトの鳴瀧塾を開いたのも未曾有の特典であつた、シーボルトの愛妾其扇と云ふのが姙娠して產は出島の病室でしたと云ふなどは驚くべきことで、長崎の役人どもがいかにシーボルトのため特別な取計をしたかゞ想像されます。然して又その頃の和蘭通辭は吉雄權之助、稻部市五郎、石橋助左衛門、檜林鐵之助、茂土岐次郎、名村三次郎などはシーボルトの門人たちに和蘭語學を敎へて授業上の補助に盡力しました、然して學問上のことにつきてシーボルトに裨益をなし助力を與へたのは門人どもでありまたその當時の日本の學者たち、家族身寄の病氣を直して貰つた恩を知つた、日本の人々でありました。シーボルトが自分に左の通り記して居ります。

忽ちにして長崎は歐羅巴學問の親友たる日本人の集合地となれり。美馬順三と岡研介とは

余が創めたる鳴瀧學舍の最初の都講となれり。此小天地よりして科學の文敎は新光明を漸次に四方に放ちやりてそれとともに吾人の日本國との親き締交はりは弘がり行けり。今よりは余が余の門人と稱へ得べき人々は此邦に歐羅巴の文明の最初の基礎を据え、我が研究につきて多大の翼賛を與へたり。

彼等門人は余を師として學び、鄕里に歸りなば對策的論文（今日でいふ卒業論文）を著はして余に渡すべしとの條件にて立派なるドクトルの許狀を得たるなり。かゝる人にはそれ〴〵問題を授けしが、そは通常（イツモ）日本並びにその近國屬國の國土學、國民學、又は萬有學に關して從來餘り歐西人の知らざる有益なる事共に就きてなり。

シーボルトは日本につき種々のことを研究し又前に申し上げた通り數限りのない資料を得たので

あるが、その内で最も重大なもの貴重なものは江戸旅行中に得たもので、殊に幕府の天文方兼御書物奉行高橋作左衛門から貰つた日本地圖數通であつて、そのために後に――文政十一年から同三年まで續いた――裁判事件まで惹き起したのであります。（此事件のことは史學雜誌第三十五編第六號及第九號に悉しく書いて掲げます）

一體其頃には日本の事を研究するは非常にむづかしいことであつた。其當時には色々な禁制品がありまして、日本の地理のこと、歴史のこと、或は日本の人種のこと、宗教のこと、さういふやうな事柄を口頭書でも書類でも外國人に明かにしたら、それに關係ある物品を外國人に讓與賣渡すことは嚴禁でありました。其中でもやかましいのは宗教に關するもの、戰術兵法に關するもの、色々の制度儀式に關するものでありまして、武器だの貨幣だの地圖だの輸出は雛形でさへ、玩具でさへ嚴禁されて居つたのであります。さういふ時分であるのにシーボルトは前に申し上げた通り植物や動物は兎も角、色々な地理、歴史、武術、宗教などの參考材料を非常に澤山に蒐集したのであります。これにはマア非常に骨の折れたことでありませうし、それを持つて歸られたといふことは非常な冒險な大膽不敵な事であつたと考へます。さういふ物を蒐集することは出來るにしても、嚴重なる取締のある所を拔けてそれを國外へ輸出しやうといふには餘程の決心が無ければならなかつたことも思ひます。

研究したいと思ふたのであります、此時シーボルトに同行した日本の吏員はシーボルトの知人、特に懇意な人々又は門人などでありましたから種々研究上に便宜なことがありました。一行の日本屬僚として一番の頭は水野平兵衛といふ添檢使でありました、又事務會計を預かつたのが通詞目附

の末永甚左衛門といふ人でありました。こんな人々は種々の嚴格な法規があつたにも拘らないで、なりたけ監視を寛やかにして、たゞそれを形式的に應用しただけであつて、馬關其他要所々々の測量をした時などでも、そう猥りに咎め立てをしないで居まして、國家宗教の制度、用兵や施的の設備などを視察調査するときでもなりたけ見ないやう知らない樣な風をして見逃して居りまして、大抵な檢測などは學者が好事にするのだ位に思ひなして不問に附して置きますし、時としては役目の上から不意に和蘭人の部屋など臨檢する筈のことでも何となく前から臭はして置いて、それから出向ひたりするのでありました。シーボルト自身も此事を書きまして

國内の事柄を取調べ、國の組織、宗教の儀式を研究し、軍事政治幷びに諸の施設を調査するは外國人には嚴禁してあるなり。内國人に

對しては又之に就きて外國人に報告すること又如何なる方法なりとても之につきて外國人を助くることは、苛き刑法を用ひて禁ぜられたるなり。此一行中の日本人とても皆かゝる法令を嚴に守るべく誓を立てゝ來れるなり。少しにてもその誓に違ふことあらば、おのれが生命はすぐにも懲さるべきを知れり。されど彼等は教養ある歐西人と應接するにつけて、政治的見解は豐かに弘くなり、日本政府の偏狹なるを知り拔きたれば、大抵の場合法律の形式に背かざる以上、出來得る限りは寛大に事を計らへるなり。かゝる遠慮なくしては外國人は日本に於て國に關し人に關し、何につけても、此禁令に觸れざることてはなくて、學術的研究など思ひも寄らぬなり。我檢使たちはかくて其職責を盡し、かくて配下の報告に滿足して安意するなり。

と云つて居ます、シーボルトが如何に此人々の取計ひをありがたく思ひたるか此事意から察せられるのであります。シーボルトに從ふて行きました門人傭員などは又シーボルトを保佐して研究の成績を少しでも擧るやうにしてやりました。遠い所へまで行つて綿密に搜してやつたり、險阻な所を攀ち登り降り立つて珍らしい草樹を採集したり、宿へ着くと直に町へ出掛けて行つて鳥や獸を買つて來たり。湊長安などと云ふ人は一行よりは八日も先に起つて歩いて行つて高山植物や山椒魚なんか色々參考になる動植物を取集めてやつたと云ふことであります、其他宿々に居た門人などは先生が來たと云ふので珍らしいと思ふ產物なんかを携えて面會に行き又は兼て賴まれて居る日本の國日本の民に關した論文をコシラへてそれを渡したりしたが、その他にも兼て長崎から文通で交際して居つた知人や病人を連れて行つて診て貰ひ療治をして貰つた人が懇望のため、報謝のためにシーボルトに贈つたり敎へたりした萬有學的、人類學的、地理歷史的の材料知識は隨分澤山にあつたのである江戸では最上德內、桂川甫賢、栗本瑞見、岩崎常正、尾張では水谷助六、大河內存眞、伊藤圭介、京都では小森玄良などから動植物鑛物のことにつきて益を得たり、地理學、其他につきては殊に高橋作左衛門、最上德內から色々の參考品を貰ふたのはシーボルトに東洋輿地學につきて一大功績をなさしめたのであります。其他大名では島津重豪だの奧平昌高、公卿では小倉中納言なんと云ふ蘭學崇好者があり、民間にも下ノ關の町年寄伊藤杢之允、佐甲甚右衛門等や江戸の旅宿の主人などそれに劣らない和蘭好きの人々があつて旅中の感情を慰藉したのであります。シーボルト自身又左の通り言ふて居ます。

『その邦の情勢、その民の言語、その風俗及び習

慣は余は之を教育ある日本人との交際より知り得たり余自身の出入も初めには纔かに九州の一部就中長崎近傍に止りしが、然るにも拘らず余をして遠く隔たりたる邦國の天産物をも知らしめたるは余に萬有學及び診斷治療の學問の教を受けたる醫學者なり。日本の諸地方より遊學し來りてその師たる余に送るに天産物及び其繪畫其他の書籍を以てしたる人々なり。余が門人はその國の諸地方より生鮮なる又は乾腊せる動物植物或は金屬類を輸送し蒐集するに勉め、新著の和蘭醫たる余が長崎に誘ひ寄せたる數百の患者は眞に珍奇なる――或は己が目に新奇なりとする――天産物を余に贈餽して、之によりて有効なる治療施術を享けんことを望みたり。長崎は海産物の蒐集に殊によく通じて、何地に行くとても此より善きは望むべくもあらず。魚市場なる魚蝦等は余の觀察又は學問に熱心なる門人どもの研索の材料となれり。余は又一二の獵師を傭ひて之をして、鳥又は獸を持ち來らしめたるが、蟲類を搜ね廻はらんがためにも亦人を傭ひたり。出島には植物園を作り、こゝに栽培せる植物は諸地方との連絡によりて、暫くの間に日本種、支那種合せて一千種以上を數ふるに至れり。余は之によりて日本國の動物幷びに植物に關する知識を得。蝦夷千島よりさへ余の療法に救はれし日本貴人の手にて萬有學的、人種學的の材料數多を得たり』

シーボルトが其やかましい時代にどういふ風に澤山の材料を集め得たかと云ふと、彼は第一には病人に治療を施してやり、中には死ぬ所を生かしてやつたと云ふやうな者も大分あります。門人に醫學藥學のことを教授してそれの學識の足りないのを補ふてやりまだ直し得ない病氣を直すことなどを教へてやりました、又長崎に居るとき或は江

戸へ行く道々で、知人或は役人さういふやうな者に色々な外國の品物を贈つてやつた、歐羅巴の書物器械だの南洋から持つて來た珍しい物などを與へた。こんな色々なことがあつて、それ等の關係からして自分は何も謝禮を得やうと云ふ目的ではなかつたのであるとシーボルト自身に書いて居ります、それには多分報謝を求める意味も中に強く籠つて居たのであらうと思ひます。日本人は大變に恩に感じて人を慕つて永く忘れない人間である、即ち自分の恩に感じ自分を慕ふと云ふやうなことから、さういふ病氣を治療して貰つたり、學問を敎へて貰つたり、又種々な物を貰つたと云ふのに對して色々な珍しい物を與れたり、分らないことも敎へて與れたのである。第二には日本人は訪問面會をしたり交際をする時分には何時も對手に品物を贈ると、さうすると片方から又々挨拶と云つて品物を遣る。是は日本の交際上の禮儀である。歐洲などにない美風である。それに依つてシーボルトは門人や友人や初めて遇ふ人から色々な物を貰つたのである。シーボルトの江戸參府日記の中にこんなことがあります。『文政九年（新）三月一日の條に（下ノ關）で本日は出發の日なり。朝早くより門人知人告別の爲め來り。かくも早く來りしは、其人々も自から益を得んためなり。日本の習にて人に遇ひて物を贈りたる後には別に臨みてその返しを受くべき順序なり。余にもその準備あり。彼等はそれ〳〵相當のもの有用のものを貰ひ受けたり。藥劑、藥瓶、和蘭の書物、外科の器械は醫師に分たれ、飾置物、硝子器、金革物は其他の知人に贈られ、よく接遇したる兩旅亭の家族殊に主人には別して心を配りたり』云々さう云ふ譯で日本の美風たる贈答の關係で色々な日本のものを貰つたのであります。第三にはシーボルトが遠く隔つた異邦に來て孤立の狀態にありながら

熱心に學問を忠勤するこれを見て當時の日本人殊に和蘭學者、和蘭崇拜者、病人を抱へた家族など、いづれもそれに同情し、仁義の信念からもかゝる人には便宜を與へてやらうとする、又かゝる好意が分明して書物品物などもやらうと云ふことになつたのであります。

シーボルトが江戸で種々の研究材料を得たことについて、後に前申しました裁判事件のときに差出した答辯書にも左の通りに記してある、是は中山通詞がその時分にシーボルトの書いた原文から飜譯して長崎奉行に出したものであります。

高橋作左衛門樣と御熟懇に仕候次第は千八百二十六年カピタン・スチュルレル江府拜禮之節私儀參府仕、江戸表旅宿へ作左衛門樣御出有之。專ら諸術諸學之御話申上候處天文地理本草究理其他之通に有之候得者、歡喜之思ひをなし終に御懇意に相成滯留中度々旅宿

に御出被成候に付私得達仕候儀者御傳受申上尚私所持之書籍地圖或者右學道要用之器等入御覽候處中には御懇望被成候品は差上候も有之。或は寫取差上候品も御座候。作左衛門樣よりも地圖或は風土記等御見せ被成候內新製品も有之候に付不苦儀に御座候はば被下置度御願申上候處、早速被下置候品も有之、或は御約束申上置追て御寫取被下候品も有之候御當地へ歸着仕候後も互に熟心の道に御座候得ば折節者御文通仕候。聊右學道要用之品又は硝子器小間物類等追々差上候儀も有之。作左衛門樣よりも御約束之品或は御當國幷に蝦夷地邊出產之品々等被下置候儀に御座候。勿論右之外於江戸表醫師方數多旅宿へ御出被成候中には蘭語に能通達之御方も有之、病症之問合せ等有之候に付相應之療法等傳受仕候。右等之向々よりも爲謝

禮一諸國之產物珍器珍石貝類草花其外之繪圖或は押葉等差送候に付其時――右之外右同樣之品々旅中にて相集候次第は於二所々一難治之病人治療相賴候に付藥劑或は手術等相施候者、或は蘭法醫術熱心之醫師衆、療治方問合候に付藥法等傳授仕候向々より謝禮として金銀或は端物等差送候得共、素難治を救ひ候ため治法を授候故、右等之品は受用不レ仕、尤醫道幷物產其外執心之學道要用之品は至て相好候儀自然と流布仕候哉、禮物にても相送候向々より却て學道要用之品差向候に付受納仕候儀に御座候處、右之內には御制禁之品も有之候由、私儀一向相辨不申候處去冬以來追々御吟味に付御數を請候處、御制禁之品と申儀承り奉二恐入一候（丑正月外科シーボルトより差出候願書）

こんなことが書いてあります。これによつて前に申上げた樣な幾多の參考品が何樣いふ風にしてシーボルトの手に入つたかは分ると思ひます。

なほシーボルトに色々な材料とこれに關係してその說明批評とを與へたのは門人どもの助力の少なくないことについて少し文書を御目にかけたいと思ひます。先きに申上げた通りシーボルトはいつも門人に免狀をやる時に課題を與へて論文を書かせました。シーボルトの日記に下關で文政九年新二月二十六日に受取つた論文として河野コサキの「長門周防の地理學的統計的記述」松山ソウリウの「海鹽製造法」ブンキヤウの「多く用ひらるゝ染料及び織物に就きて」高野長英の「鯨魚及び捕鯨に就きて」某の「日本に於ける稀有なる疾病の記述」某の「最もよく用ひらるゝ藥劑の品目」などが擧げてあります。而もこれは皆和蘭文で書いたものらしくあります。此頃高良齋の孫で高於菟三と云ふ人の持つて居らるゝシーボルトが自分

で書いた書付がありますが、その内容はいづれもこれに似寄のことでありまして。それは三通あるのですが、一通には、「日本人は男と女と何れが多きか、その割合如何（歐洲にては男と女二十と二十一であるが日本にてはそれより多からん）」「日本人百人中一年に何人死亡するや（歐洲三十三人中一人の割合日本にては少なからん）」「日本人千人中醫者になるもの何人（内科、外科、藥劑師）」「藥劑としては植物性と鑛物性と何れが日本人に有効なりや、兩方の最も効ある物二三品を擧げよ」「日本の内外兩科に關する論文を記せ（日本の病氣の分類、診斷法、治療法の大略、藥劑の効用）」「或人の足の腫れたるは病氣か」「脹滿の他に腹の腫るゝことあるか」「日本の何處の人最も身高きか」「北部の人、南部より小きか」「日本人中（蝦夷人體小さく頭大きく毛多し）と日本人（頭平たく鼻少しくカーブをなし頭髮赤黑し）とにより違ふ名稱ありや」などと云ふ問題が書いてあるし、別の一通には「日本に於ける主要なる藥品表」「日本に於ける病名の表」「日本諸國の主要物産表」「雁皮紙に片假名、いろは文字」「簡單なる日本文を余の手本として」などと云ふ注文が書いてあり。なほ一通には「日本の庭園の栽培法（蘭、菊、つゝじ、櫻）」「純日本の醫學につきて」「日本の主要なる産物」「有用植物の人體に影響（催眠、魔醉、興奮）」「鳥魚動物の捕獲法」「漆の製法」「字引の編纂」「海に居るを除き貝類の採集」「種子、花麭、苔の採集」

「日本の有名なる人物の名字いろ別」などと云ふ問題や注文がかいてあります。これによつてシーボルトがどんな風な問題を出して門弟の人々から答案を募つたかと云ふことが窺ひ知られると思ひます。

以上がいつまんで申上げますと、シーボルトの

日本研究については和蘭政府及び瓜哇總督の命令があり補助がありて取りかゝり、日本に來てからはシーボルト自身が一生懸命に身命を拋つまでに努力したことは勿論だが日本人が長崎でも江戸旅行中でも貴賤上下の別なく好意を以て色々と助力し便宜を與へたし、殊に門下と云はれた人々や友人學者の助勢は著しいものであつたのである。

第五、シーボルトが日本研究によつてその當時に得た奇禍及びシーボルトの心事。

シーボルトは以上述べた樣に政府の援護、日本人の助力の下に必常な骨折と勇氣と勉强とを以て前申上げた樣な莫大な研究資料を得ました。是に由つて彼は「日本。日本及其近國屬國の寶函」「日本動物志」「日本植物志」などゝ云ふ澤山の名著述を世界に發布した古今無類の日本研究者と云はれて、此點につきて今日に至るまで高名でありますその功勞には慥かに酬ひられて居ることゝ思ひますが、その當時にはとう〳〵取集めた資料のために德川幕府から睨まれて、前に申上げた樣な輸出禁制の品々を持出さうとしたと云ふので、嚴しい訊問を受けて一年半許りも長崎の出島に閉籠められて、本國へ歸ることも出島から出ることも許されずに。時々には色々苛い刑罰にも遇ふかと云ふ評判もあつて實に酷い目に遇ひました。その時に主な問題になつたのは何であるかと云ふと前申上げた幕府の天文方高橋作左衛門に貰つた日本の地圖とそれから今から考へればそれこそ何でも無い——德川家の侍醫土生玄碩から貰つた德川家の紋章（三葉葵）のついた紋服とであつた。高橋はシーボルトが持つて居た地理の書物繪圖を日本の爲世界の形勢を知るのに入用であるから、之と交換する目的で日本地圖を與へたのである。土生は眼科の專門家であるからシーボルトの心得て居る眼手術に必須な開腫藥を敎はつて多勢の病人を救

はふと云ふ熱心から葵紋服を同じく交換的にシーボルトにやつたのである。此樣な自分を打棄てゝ世の爲め國の爲めにしたことではあるが、シーボルト事件が起ると同時に兩人とも囚はれの身となり高橋はシーボルト事件が片付かない內に牢死を遂げるし。事件が濟んでから、その子二人とも遠島になり、その部下の人々は追放、その他所刑になるし、土生は同侍醫であつた其子とともに免官(改易)となつて仕舞つた。其他にも此事件で澤山に受刑した日本人があり、シーボルトは日本御構と云ふので本國へ追ひ歸された(後に三十年許も經つて日蘭條交通商條約が成立したので、再度渡來した)その事件審理中はシーボルトは堪え難き悲しみに陷ゐつた、知人門弟どもが自分のための取調を受けたり拷問にかゝつたりするのを聞いては憂ひに沈み悲しみに堪えないで同情の餘り絕食したり、衣を薄くして寒風に曝されたりしたこと

もある。彼等に申譯がないと云ふので刄に伏して死なうと決心したこともあつた。シーボルトは日本と云ふ古來鎖國の土地へ學問的研究を目的として來るに就いては初めからその覺悟はあつた。

「歐羅巴を去りて九ヶ月、大海原に航し續けしこと五ヶ月、自分の任地たる國に來りては熱帶の氣候に熟れずして重き病にかゝり軍醫として屢快からぬこともあり。料らずも今や此等の關係より脫け出づることあり。東方の行程に上りし時の初志を達し得るに近づきぬ。今や歐羅巴人の往來すると云ふ國の中最も遠き異なる邦に向ひて櫂を進めつゝあり。但し其國には吾人は自由に居ること叶はず。彼が自から賢明なりとするその政策に鎖されて其國とも其民とも自在に交はること能はざるべきは遺憾なり。されど萬有學者、世界旅行者の歷史は幾多熱心と忍耐との例類に乏しから

ず。余は彼等が勇氣に顧みて自ら奮ひ起てり。少壯なる旅行家の豐富なる志想に鑑み、彼等が勞苦を厭はず生死の界にも躊躇せざるを想ふとき、余は我志ざす所の地に向ふて突進してひるむことなし。幾分にてもあれ、その所期を達することを得ば、學問の繁榮進歩の爲めに犧牲となることは余の辭するところにあらじ」

然しながら十分材料も蒐集したし、任期の滿ちたので、いざ迎の船に乘つて歸らうといふ所で捕まつて色々な目にあひ、友人門弟どもの悲慘な目にあふたのを聞いては實に落膽し氣力も阻喪したことであらう。これがシーボルトが文政六年渡來、文政十一年迄滯在して日本を研究したその價ひなき報酬であつたのである。

其當時シーボルトは和蘭人ではない露西亞人ではないか、露西亞の國事探偵ではないかと云ふ樣な話もあつて、そんなことで出島に幽閉されたのだといふ人もあつた。今日でもまだそんな風に考へて居る人があります。シーボルトは和蘭の王室と露西亞の帝室とは其時分親類であつたから露西亞に懇意な人も多かつた、露西亞は東の方に版圖を弘めやうとアセツて居たからして、そんな疑の起るのも最もであるが、然しシーボルトが日本に居る內は勿論だが日本を立つてから書いた多數の文書の中に日本のためになること日本を稱へた辭は隨分あるが、日本に反感乃至は日本を輕しめ日本を發いた樣な文句は少しも見當らない、又彼が日本でこんなヒドイ目にあつて歸つたのであるけれども、それから後も再度渡來まで、再度渡來後も日本の爲め日本の平和的開國のために絕えず周旋をし盡力をして居るのを見ても彼が日本に常に好意を持つて歐羅巴に活動して居つたことを見ても彼が何か他國の爲めに日本を裏切る樣なことを

胸に蓄へて居たとは思へない。和蘭にあつた彼の邸内には「日本」といふ名を付けた別莊があつた、その傍に老母の爲に「日本の後の國」といふ廬を作つた。彼が千八百六十四年ミュンヘンで死なうとする瞬間には「吾は第二の鄕里日出處へ行かう」と云つてそれから目を閉ぢました。此御話を終らうとするに際して私は猶一つ中山氏文書中から次のものを讀むだけの時間を與へて戴きたいのであります。

文政十二年六月シーボルトはカピタンからカピタン部屋に呼ばれて高橋との物品の遣取は何人が取次いだのであるかと訊問されたときに、自分の不心得から何氣もなく周施して呉れた人々多勢を罪に落とす樣になつたのを歎いて、翌七月に抛二我身一決心で、左の通りの願書を奉行所へ差出しました。

昨夜（正月六日之夜）かぴたん私儀を召呼、地圖其外之品々誰々を以取遣仕候哉、有躰可二申上一旨御沙汰之趣を以、嚴敷吟味仕候。乍一恐御上之御正直之御政道を以、御糺之趣、甚難二默止一奉一存候。然に私種々之儀を相調べ、且諸人に指南仕候ため、ウエーテンスカッヘン（天文地理物産等其物の理數を知る學也）之業に深く覺心仕候餘り、不一思大切成御上之御掟を犯候に落合、何氣なく心配致呉候者共之罪に相成候儀を歎息仕。名前申上候儀御用捨之儀廣而御歎申上候儀に御座候。右掛合之者共儀、全く野心なく欲心もなく、大切成事を不一辨、何心なく仕出し、今斯罪に落入候儀、於一私右之成行進退差迫愁傷中に徹二骨髓一候儀有樣奉二申上一候。素私自己より仕出し候罪、如何して數人を罪に落すべき哉。然といへども御上之御正直なる御制度を相背くに相當り、誠に冥罪之程恐懼仕罷在候。

一。私相犯候多罪之御赦免奉願候ため、御答申上候儀、今日迄御猶豫御願申上候。實に多人數右之通成行候儀は誰人之罪にも無御座、素私仕出し候儀に御座候得ば、如何樣にもいたし、多人數之難を御赦免奉希候ため、聊存意之次第奉申上候。

一。乍恐申上候存念御取用之程難計奉存候得共、抛我身歎願仕候。既に本國江者私儀只母壹人而已有之、兄弟親類迚も無之、不本意ながらも歸國さへ仕候得ば、母之氣を相慰め、嘸相悅び可申候得共、斯御國法を犯し、數人御仕置に相成候を乍見歸國仕候はゞ、於本國朋友ども之誹謗を請候儀も、難忍御座候に付、生國を見離候儀者甚歎敷奉存候得共、御國法を相犯候私儀に御座候得ば、私身分を御國に奉任候間、何卒御慈悲之上、生涯御國に被差置、隨身之御用等御座候節は、爲冥加相勤申度奉願候。右に付斯相成候儀者、全く私之取爲に而、餘人之野心を以候仕儀に者、聊以無御座候段者、乍恐幾重にも奉誓候。

一。是迄御當國之人々江諸學相傳仕候譯を御憐察被爲下、右御願申上候通、御許容被成下、御取上にも相成候はゞ、重疊難有仕合奉存候。

一。右御願申上候通、御慈悲之御沙汰に相成、此節掛り合之者共之罪科輕く於相成候者、私儀本國頭役ども江申譯も相立、且朋友共江相聞候而も、御慈澤之程可奉感激。於私儀生々世々難有仕合奉存候。此段宜御鑑察被爲成下、被爲垂御憐愍被下候樣重疊奉願上候。丑正月　外科　シーボルト

（右は長崎の和蘭通詞石橋助十郎、中山作三郎の和解なり）

シーボルトは學問の爲め、日本研究の爲に犧牲となることをも厭はない、初めから決心して日本に來たのだからして、日本に來た以上出來ること丈のことはしたい。自分では國法に嚴禁されて居る物でも何でも構はない研究材料になるものは殘らず集めやうとしたのである。大膽に何も顧みずにやつたのであらう。然しそれもただ猪武者のやうに何でも構はなかつたのではなかつたのであらう。他の人の迷惑になつても自分さへ宜ければそれで宜いと云ふのでなかつたのでありませう。この歎願書によつて見ると、自分は國に歸ることを止めてどうか日本に此儘居つて日本に歸化して身を日本政府のする樣に任かせ、何か用向があるならば日本の國の爲に盡したいと云ふのであります。此衷心の誠意から考へても決して自分一個の爲に盡し、自分のことさへ成就すれば日本の友人や門弟はどうなつても構はないと云ふ樣なさもしい心の人ではなかつたのであります。彼が日本で盡し世界に殘した業蹟から考へても彼は學問のため、その國の日本との交通のため日本へ來たので或る外國のために日本のことを探偵に來たのではないと考へます。

吳　秀　三